
気になる師匠が閑静な住宅街で全裸になった

澤群 キョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気になる師匠が閑静な住宅街で全裸になった

【Nコード】

N5066Y

【作者名】

澤群 キヨウ

【あらすじ】

暑い夏の帰り道、僕は師匠に出会った。情けなくてだらしなくて、だけど愛すべきおっさん。これは僕と師匠の、二十歳も差がある二人の不思議な友情の物語。

● 出会い

僕はその光景をただただ、黙って見ていた。

額から血を流した師匠が、手錠をかけられてパトカーに押し込まれていく。

足が一步だけ、前に出る。唇が震えて、声を出すことはできなかった。

（師匠……、師匠……！）

僕は師匠の名前を知らない。苗字が、多分、山城さんなんじゃないかな、くらいにしか知らない。

（師匠……！）

*

僕と師匠の出会いとは、ちょうど一年前のこと。

通っている小学校は築四十年近いボロいもので、当然ながらプールもボロい。プールサイドで散々日光に晒されて、日焼け止めなんかまるで意味がないと思えるコンガリ感にうんざりしながら帰り道を歩いていたら、声がかかったんだ。

「よう、少年！ プールか？」

それがどこからした声なのか、僕はキョロキョロと辺りを見回した。そして、道路右手にあるオンボロアパートの2階の窓辺でタバ

コをフカしている中年が発生源なんだと特定し、無視を決め込んで再び、家に向かって歩いた。

「無視かよ！ 今の小学生はなつてねえなあ！」

無遠慮に斜め上後方から罵られて、もちろんちよつと腹がたつたけど、振り返らずに歩いた。危ないオッサンの相手なんかしたら危ないから。

次の日もプールだった。先生に出席のスタンプを押してもらったプールカードを眺めながら一人、家に向かって歩いていたら、声がした。

「よう、少年！ 勤勉だな。今日もプールがご苦労さん！」

リズムカルに楽しそうに、その中年は笑顔で声をかけてきた。今日はタバコではなくて、凍らせて吸うタイプの細長いアイスを手を持っている。

「一緒にどうだ？」

小学生は知らない人の誘いに、そう簡単にはのらない。そういう風に大人が教えてくるから。

知らない人から物をもらってはいけない。

知らない人についていったらいけない。

「なあ！」

だから僕は無視をした。当然だ。プール帰りの小学生をアイスでつろうなんて、なにか邪мана考えをしている人に違いはない。たまには男の子が好きな変な人もいるって、聞いたことがあるし。何をするのかは知らないけど、きつとおぞましいことなんだろうと思う。そんな体験はまっぴらごめんだ。

「少年！」

上からかかる声を避けるようにして、僕は身を低くして走った。

土日を含んで、月曜日はまたプールだった。憂鬱な気分で、ただお母さんに心配をかけたくないから笑顔で家を出る。それでバシヤバシヤ泳いで、先生の話の間は日差しに焼かれてもう真っ黒になったみんなの背中を見ながら過ごして、またバシヤバシヤして。

今日も一人で家に帰る。友達がわいわいと連れ立って帰るのを見送って、最後の一人になってから学校を出た。

「よう！ もう真っ黒だなー、小学生！」

懲りずにまた、声をかけられた。その時思ったのは、僕も懲りてないなっていうこと。変なおじさんに声をかけられなければ他の道を行けばよかったのに。なんとなく土日を含んで時間が空いていたから、もう諦めているだろうとか、普通の会社勤めならいない時間帯だからいないんじゃないかとか、そういう楽観的な事を考えていたんだなって。

「暑かったろう。毎日頑張る君に、ご褒美を用意している！」

しかも今日は窓からではなくて、道のと真ん中で待っていた。あの辺りにパラパラとひげが生えていて、髪は暑苦しく肩の辺りまで伸びていてすごくだらない。着ているＴシャツはよれよれだし、下はハーフパンツ一丁。この格好で外に出ていいのは、誰の目にもつかないようにササッと出る、朝のゴミ出しの時間だけだと思う。

僕はちよつと悩んだ。どうやって避けようかって。来た道に戻るか、おじさんの横をすり抜けていくか。

「アイスだ。先週のは安かったからイヤだったんだろう？ 本日はこれを用意したぞ！」

おじさんは丸いカップのアイスをドーンと前に突き出してきた。有名なメーカーの、年中売ってるバニラ味のアイスクリームだ。この炎天下で僕が通るのをずっと待ち構えていたのだとしたら、あの

中身は多分もう液状になっているだろう。案の定、突き出したアイスのカップは汗だくになって、ポタポタと水滴を地面に落としている。あれをもう一度冷凍庫に入れば固まりはするけど、シャーベツトみたいにシャリシャリになってしまつて、滑らかさも美味しさも損なわれているアイスではない別な何かが出来上がる。一度やったことがあるから、知ってる。

「すいません、いりません」

小声で手早く答え、すり抜けようとしたんだけれど。

「好みではなかったかな？　一応冷凍庫に、チョコレート味も用意しているぞ」

おじさんは二カツと笑顔で、とおせんぼしてきた。やっぱり、回れ右、したほうがいいのか。

「失礼します」

振り返つて、一気に走ろうと思った。けど、手を掴まれてしまった。

「待ってくれ」

お母さんに持たされた防犯ブザーはランドセルにつけっぱなしだ。もし周囲にこの危機を知らせたいのなら、叫ぶ必要がある。できるか、僕に。誰か助けてください！　変質者です！　って大声をあげられるか？

「少年、俺に協力して欲しいんだ。けっして怪しい者ではない！」

「怪しいじゃないですか」

掴んだ手は離さないし、まず最初に物で吊ろうとしてきた。そんなやり方をしてくる大人に警戒しないのはよっぽどめでたいチビっこだだけだと思う。

「俺はライターをやってるんだ。シナリオ書いてんの。で、今の男子小学生のリアルな心情を知りたいんだよ」

「ライター？」

火をつけるもの、ではないって、少ししてから気がついた。物を

書く人だ。シナリオを書いている。なるほど。だけど、やっぱり見
ず知らずの小学生に声をかける方法としては今のやり方は非常識過
ぎて、頭から信じることはできそうにない。

「すいませんけど」

「頼む！ 少年は俺のイメージにピッタリなんだ。小学校の前で随
分探したんだけど、少年が一番だったんだよ。だからさ、話だけで
も聞いてくれないか？」

結局しつこさに根負けして、僕はおじさんの部屋に通されていた。
いつでも逃げられるようにと、おじさんは笑いながら僕をドア側に
座らせて、しかもドアは開けっ放しにしてくれた。

部屋の中はクーラーがそもそも設置されていなくて、蒸し暑い空
気を扇風機が散らしているだけ。

蝉の鳴き声がこれでもかかっていうくらい大きな音で聞こえてくる
中、スツとアイスを差し出された。

「こっちは俺が後で食べるわ」

さっきまで炎天下で溶かされていたバニラ味は冷凍庫にしまわれ
て、僕のの前には、バニラと同じメーカーのチョコアイスとプラスチ
ックのスプーン。

「暑いだろ？ 遠慮なく食べてくれ！」

「……頂きます」

カップのふたを開けて僕がアイスを口に入れると、おじさんは満
足そうに笑った。

● 罰

「少年はゲームが好きだろうか？」

おじさんは狭いテールブルの上に、紙をバサバサと広げていった。

「シナリオを書いていけないといけないんだが、登場人物の中に男子小学生のキャラクターがいるんだ。何せ俺が子供だった頃と時代が全然違うだろう？　なので、君の話を聞いてちょーっと参考にさせてもらいたいんだな」

広げられた紙の中からイラスト入りのものを選び出して、おじさんが見せてくる。そこには、気の弱そうな表情の眼鏡の男の子の絵が描かれていた。

「ちょっと気が弱くて、いじめられてるけど親には言えなくて、ネットで憂さ晴らししてるっていうキャラなんだぞ！」

胸が疼いた。

そんなキャラクターのイメージにピッタリだって言われたら、普通なら怒ると思う。

だけど僕は怒らなかった。ドキリとした。

「俺の小学生の時にはネットなんかなかったからさ。少年達は生まれた時から、携帯もインターネットも『あつて当然のもの』だっただろう？　だから、感覚が違うと思ってなあ」

僕の表情を見て、おじさんはニツと笑った。

「少年もインターネットやるか？　なんだ、あの、ちっちゃいキャラクター動かしてさ、ネット上での友達作ったりとかしたことはある？」

答えようと動かした口の中が甘い。チョコレート味の、ポリウー
ムが売りのアイスは半分食べたところで止まっている。食べ過ぎて
ちよつと頭がキンキンしていたから。だけどこの残り、どうしよう。
冷凍庫にしまっておいて、おじさんが後で残りを食べる？ それは
ちよつと、気持ち悪い。嫌だ。

「アバターですよ。ね。やったことはあるけど、もうやめました」

「そうか。みんながみんなハマるわけでもないんだな」

答えながらちよつと悩んで、結局続きを食べ始めた。熱い空気が
アイスをどんどん溶かしていつて、カップの底には茶色い池が出来
ている。

「現実の友達と、ネット上でできた友達に差はあった？」

ぼたりとアイスがテーブルの上に落ちて、小さな円を描く。

「……ないよ、そんなの。違うように思ったこともあったけど、結
局は一緒だった」

僕の呟きに、おじさんはうんうんと頷いている。笑顔で。

みんなが遊んでいるという交流サイトに、僕も誘われて参加して
いた。それぞれの名前をつけて、そっくりにしたキャラクターを作
って、放課後はいつもパソコンの前で遊んでいたんだ。

だけど僕は、それにすぐについていけなくなった。お金を払わな
いでサイト内の通貨を手に入れる方法も、話題についていくために
やらなくてはいけない無料のゲームも、すべてが次々に移り変わっ
ていく。画面の中で新しく知り合った仲間を紹介され、そのすべて
にちよつとずつ付き合っていく。誰かが気まぐれに言い出した楽し
そうなものに一日中付き合わされて、ひとつでも取りこばせばもう
仲間はずれ。学校でもいつの間にかサイトの話しかしていない皆の
中には混じれなくなっていた。どうやって友情を取り返したらいい
のかわからず、右往左往する僕。華麗にスルーしてくる、かつての
友達。パソコンばかりしてるってお母さんからは白い目で見られ、

宿題も忘れ、目はしょぼしょぼとして、肩も重い。

疲れた疲れたばかり言っているおじいちゃんとはほとんどかわり
のない、へとへと of 僕。

楽しかったはずのことが苦痛になってしまった息苦しい世界。

考えるだけで目の前が少し暗くなる。

「少年！ 恋はしてるか？」

「はい？」

うつむいていた顔をあげると、本当に愉快そうな笑顔のおじさん
が目に入った。

「恋だよ。ラブ。好きな女の子、いるだろ？」

「いないよそんなの」

「本当かあ？」

体のだ真ん中の部分から、ゾワゾワとした何かが広がる。熱い
ような冷たいような、気持ちの悪い感覚だ。こんな風になんでもか
んでも口にして子供をからかう大人は僕は好きじゃない。

「もう帰ります」

「なんだよ、照れてるのか？ ハハハハ！」

横においていたプール用のバッグを掴んで、僕は立ち上がった。
おじさんは目をまあるくして、立ち上がった僕を見上げている。

「帰ります」

「え？ 本当に？」

呑気な声を背中に聞きながら、靴を履く。かかとを踏んだまま、
急いで廊下へと出た。

「また来て話聞かせてくれよー！」

そんな声がしたけど、返事はしなかった。

次の日はプールへ行くフリをして、図書館へ向かった。

友達に会うのは嫌だった。水の中でも、例のサイトの話ばかりなんだ。時折みんなで固まって、僕の方をチラチラ見ながら何かを話している。ヒソヒソと聞こえないように声を交わして、最後に大きな声で笑う。

先生に何を笑ってるんだ、って怒られても、すいませーんと悪びれもせずに答える。ニヤニヤしたまんま。

そんなかつて友達だった連中を見て、僕はお母さんとお祖母ちゃんのことを思い出した。お母さんとお祖母ちゃんはあまり仲が良くない。お祖母ちゃんは、お父さんの方のお母さんだ。いわゆる「嫁と姑」というやつで、「折り合いが悪い」。だけど年に何回か、二人は強い結束を見せる。叔父さん夫婦が来た時だ。お父さんの弟の奥さんである、麻衣子叔母さんのことが、二人は好きではないらしい。オブラートに包む必要なんかないか。はつきり言って、嫌ってる。麻衣子叔母さんは化粧が濃いいし、叔父さんのことを人前でも平気で罵る。みんなの前で文句を大きな声で言って、タバコをスパ吸っては鼻から煙を出し、お酒をガブ飲みする。従兄弟である悠翔君と妃芽ちゃんの態度もお母さんそっくりで、かなり悪い。

人は、共通の敵がいる時に最も団結するんだよって、お父さんは僕に言った。

つまり僕は、みんなの「敵」になったって事だ。敵という言葉は大きいかもしれない。けれど、みんなにとって僕は「何をしたら構わない」「傷つけても構わない」存在になっている。実害はない目にも見えない。けれど僕は傷ついている。あちこちから血が噴き出しているような心を抱えて、一人きりで夏休みを過ごしている。

そんな僕のおかげで、みんなは友情を深めている。

僕は最近、そんなことばかり考えていた。やめたいのに、やめられない。止まらないネガティブシンキングに勝手にうちのめされて、心の中でそつと泣いている。

「よう、少年！ 奇遇だな！」

図書館の本棚の間を彷徨っていると、後ろからこんな声が聞こえてギクリとした。

「夏休みに読書とは、感心じゃないか！」

「静かにしてください！」

「すいませんっ！」

すぐそばにいた係の人に怒られたのに、謝る声のトーンは落ちない。

僕は、心底嫌だなあ、と思った。デリカシーのない、頭の悪そうな大人。こういう人はわかったフリをして、人の心にズカズカ踏み込んでくるんだ。踏み込んで散々荒らして、何も答えない僕を「恩知らず」に位置づける。

「読書感想文の宿題があるなら、お勧めの本があるぞ」

「ありません」

「はーん、さては、涼みに来たんだな？ 図書館はいい。夏の子供の最高のオアシスだ。何せ涼しいし、休めるスペースはあるし、水は飲み放題だし、怒られない。むしろ感心じゃないかと褒められる！」

「静かにしてくださいよ！」

「すいません」

二度目の謝罪はさすがに声が小さくなっていた。それでも、静かな図書館の中では無駄に響いて、他の来館者達から冷たい視線を送られている。

「こつるさいよな、あのオバちゃん」

係の人が去ると、おじさんは調子に乗って僕にこつ耳打ちしてきた。

「おじさんが悪いと思います」

「真面目で結構だね」

運が悪いなあ、と思った。

いや、これはプールをさぼった罰だ。お母さんに嘘をついたから、バチが当たったんだ。

このおじさんに会いたくないっていうのも、サボった理由の一つだったのに。

後ろ暗い事をした僕。

当然の報いだ。

「おお……」

しょぼくれてうつむく僕の後頭部付近を、唸り声を通り過ぎる。顔をあげると、おじさんが僕の後方、遠いところを見ていた。

なんだろう、と思わず振り返る。チラリと見える、真つ白いワンピースの女の人。

「美しい」

でれでれとしただらしない顔が見ていたのは、琴美さんだった。去年同じクラスだった高橋君のいとこのお姉さん。遊びに行った時に会った事が一回だけある、清楚で優しい印象のお姉さんだ。

琴美さんがこちらを向いた。図書館の貸し出しカウンターの前。手続きが終わって、振り返ったところで目が合う。長いストレートの髪をふんわりと揺らして微笑むと、僕に軽く手を挙げてくれた。それにぺこりと頭を下げる。

僕のこと、覚えててくれたんだ。

「おい！」

そんな事を考えていたら、ボカンと頭を叩かれた。あまりの衝撃に、よろける。

「少年はあの人と知り合いなのか!？」

「ちよつと！ お静かにつて言ってるでしょうが！」

何故か僕まで一緒に怒られて、おじさんとセットで図書館から追い出されてしまった。暑い暑いアスファルトの道路の上に出ると、一気に汗が噴出してくる。恨めしい気分ですわらず睨んでみたら、予想外に真剣な表情のおじさんがこう僕に告げた。

「少年。話がある」

やっぱり、罰なんだろう。嘘なんてつくもんじゃないなと後悔しても、もう遅い。

僕はおじさんに手を引かれて、図書館のすぐ近くにあるファーストフードの店に連れて行かれた。

● 接点

日本で一番有名なファーストフード店。窓際の小さなテーブルの上には、お子様向けのハピハピセットが置かれている。ハンバーガーに、ポテトに、多分コーラ。おじさんの前には、水。

「ほい」

そしておまけのオモチャだ。大人気アニメの、主人公のフィギュア。僕も好きで見てるけど、主人公よりも一緒に旅をしてるクールなキヤラの方が好きだったりする。

そんなことを知るわけもなく、主人公のフィギュアを僕の手にぎゅつつと押し込みながらおじさんはこう言った。

「少年、あのお姉さんの名前を教えなさい」

ただひたすら戸惑う僕の向かいには、至極真剣な表情。

「ええと……」

素性の知れないおじさんに、琴美さんの名前を教える。

それが「やっていいこと」なのかどうか考えたら、ちょっと、いや、かなりダメな気がする。

「個人情報保護法に違反するんじゃないでしょうか」

「はははは！」

どうして笑われてしまったのか。僕にはちょっとわからなかったけど、おじさんはニカツと歯を出して笑顔を作ってから、僕にこう言った。

「高橋さんだということは知ってるぞ。音楽大学に通っていて、ピアノが上手なお嬢さんだということもな」

「知り合いなんですか？」

「うむむ。何故、ほにやらさんを知ってるんですか？　って言うわないんだ？」

呆れた。ひっかけるつもりだったのか。

僕がブスツとした顔をしたからか、おじさんもちよつとムツとした顔になった。そして手を伸ばしてきて、ポテトをつまんで食べた。

「美しい人の名前を知りたい。それは、人間として当然の欲求なんじゃないか？　少年だってテレビで可愛いアイドルが映っていれば、何て名前なんだろうって知りたいだろう？　そう思わないか？」

「それは確かにそうですね……」

そんな経験は確かにある。そういう場合、僕はじつと名前が出てくるのを待つが、インターネットなんかで調べるけど。

「でも、琴美さんは芸能人じゃないですから」

「……そうか。そうだな。その通りだ。一般人と芸能人じゃ勝手が違う。少年は常識を弁えた立派な小学生のようだな。実に感心だ」

おじさんは大きくうんうんと頷いて、水を飲んだ。

その様子に僕は安心して、一緒になってポテトをつまんだ。

「ハンバーガーも食べなさい」

「……でも、もう理由がないし」

「ポテトは食べられるのに、ハンバーガーがダメというのは何故だ？」

確かに。ついうっかり、気楽な気分でポテトをつまんでいた自分に、笑う。

「成長期の子供が遠慮したらいけないぞ。無理矢理連れてきて悪かつたし、お詫びだ」

そうだった。おじさんの妙なペースに巻き込まれて、何故かこんなところで向かい合って座ってしまっている。名前も知らない怪し

げな男。しつこくて強引で……。

「やっぱりいいです。僕、帰ります!」

「そうか?」

立ち上がる僕に、おじさんはさつとフィギュアを押し付けてきた。

「またな!」

また会って、どうしようって言うんだ。

気持ち悪い。

未使用のプールバッグをブンブン振りながら、暑い道の上を歩いて帰る。肌の表面を太陽にじりじりと焼かれながら、気分はズンズンと沈んでいく。

嘘をついた。プールに行くって言ったのに、行かなかった。胸がきゅゅと締め付けられる。もし、来てませんよって先生から家に連絡が行ってたらどうしよう?

そんな心配をしながら汗だくで帰った僕を迎えたのは、背中を向けたままのお母さんだった。クーラーの利いたリビングで、お気に入りのドラマの再放送をみてる。

「水着洗つときなさいよー」

「うん」

振り返らない背中に、ガッカリするような安心するような複雑な気持ちになりながら洗面所へ向かう。乾いた水着を洗面器に張った水に漬けて、洗うフリ。未使用のタオルを取り出して、ため息。これをどうしようか、っていう事と、僕は何をやってるんだろってという後悔で目を伏せる。

ちよつと悩んでから、洗った水着をタオルで包んでみた。そして、スィムキャップの存在を思い出して、慌てて取り出す。すると、コ

ロンと落ちてきた。ハピハピセツトのおまけのフィギュアだ。無理矢理押し付けられて、結局つれて帰った主人公。

そして思い出したのは、非常識なおじさんの姿。

僕は一人の女性を守ったんだ。気の利いた受け答えで危機をかわした。

あれ？

瞬間的に、頭の中に蘇った。僕が口走った、今世紀最大のミス。

——でも、琴美さんは芸能人じゃないですから

背中をゾワゾワつと撫でる、これが悪寒というものか。しまった、やってしまった。おじさんはあの後、なんて答えた？僕は馬鹿だ。嘘つきな上に馬鹿だ。一気に混乱の渦の中に落ちて、頭の中を駆け巡る不快感と戦う。

会話はさらつと流れて行った。もしかしたら、おじさんは気付いてないかもしれない。いや、しらんぷりしながら、しめしめって思ってるのかも。でも、名前を知っただけだ。名前だけで何ができる？いや、名前がわかれば何か、騙すようなことも、琴美さんのことを詳しく調べることもできるかもしれない。

水着とタオルを持ったまま、廊下をうろつく。慌てる自分に喝を入れて、なんとかそれを洗濯ばさみで挟んで干すと、僕は家を出た。

「おう、少年。どうした？」

おじさんの家の前にたどり着いたものの、そこからどうしたらいいか迷って扉の前でウロウロしていた僕はこの声にかなり驚いた。ビクツとした。マンガみたいに、うわあっとなった。

「もしかして俺の仕事に協力してくれる気になったのか？ そいつは嬉しいね！」

笑顔で僕の肩をバン、と叩いて、おじさんが扉を開ける。呆れたことに鍵はかかっていなかったらしい。

意を決して、あがる。

この間と同じ位置に座って、まずは持ってきたフィギュアを机の上に載せた。

「なんだ？」

「これ、お返しします」

真剣に言った僕の言葉に、おじさんは笑った。外で鳴いている蝉よりも大きい声で。体を反らせて、それはそれは楽しそうに笑った。「何がおかしいんですか！？」

「いや……、だってお前、オマケだろう？ それ」
その通りだけど。

「いらなら捨てればいいのになあ。少年、律儀だな！」

まだゲラゲラと笑っている。よくみたら、涙まで浮かべているおじさんの顔を見て、僕は心底恥ずかしい気分だった。いや、恥ずかしいとかじゃない。僕がここに来た目的はフィギュアの返却じゃないんだ。これはあくまできっかけに過ぎない。

「あの！」

「あははは」

まだ大きな声で笑いながら、おじさんは僕にお茶を出してきた。

多分麦茶と思われるものが安っぽいコップに注がれて、二つ並ぶ。

「ええと、あのですね」

「何だろうか」

どう切り出したらいいのだろうか、悩む。僕が思わず口走ったセリフ、ちゃんと聞いてましたか？ いやいや、こんな事言ったらただのバカだ。だけど何て聞いたら確認できるんだろう、琴美さんの名前、聞いてたかどうかって。

言いよどむ僕。そして、二カツと笑うおじさん。

「なあ、素敵な名前なんだな、彼女。イメージどおりだった」

「！」

「コトミって、どういう漢字を書くんだ？ やっぱり、楽器の琴に、美しいとかか」

ビンゴだ。いや、まあそれはいい。それより、やっぱり聞いてた。自分の間抜けさを呪う。さりげなく、この人も気が付かれないようにしれつとした態度を取っていたわけだ。

なんだかやけに悔しい。

「どうする気なんですか？ 琴美さんの名前知って、何をする気なんです？」

「何って……別に何もしやしない。ただ、美しい姿にあった、美しい名前だっけってうっとりするだけだ」

「……」

「なんだその顔は。では少年、逆に聞くが、俺が何をすると思ってるんだ？」

「えっ」

思わぬ質問にあって、焦る。そしてどう答えたらいいのか混乱し

た拳句、つい言ってしまった。

「ストーリーとか」

笑っていたおじさんの顔が、急に引き締まった。

「少年。それをいうなら、ストーリー行為、が適切だな。ストーリーする、と言ってしまう気持ちはわかる。だが日本語としては正しくないし、俺のような紳士に向かっていう言葉ではない」

前半の指摘をちよつとだけ重く受け止め、その後に続いた言葉には顔をしかめる。そんな僕を見て、おじさんも同じように顔をしかめた。

「少年の気持ちはわからないでもない。確かに、少々怪しい男として映っているだろうとは思っていた。突然声をかけ、なれなれしく接し、見た目も小汚い」

「はい」

「だがな、……おい、今『はい』って言ったな、この野郎！ まあいい。それはいいんだ。とにかくだな、ちゃんと知ってもらえば、わかってもらえるはずだ」

何をだろう。

おじさんはえっへんと腕を組んで仁王立ちしたまま黙っている。

「何をですか？」

「……少年、頼むぜ」

何をだろう？

「見たらわかるだろう。俺が、悪事を働くような人間じゃないってことが」

おじさんが目を見開いて、僕の顔を覗きこんできた。

タバコを吸う人独特のイヤな臭いに、思わず目を閉じる。

「ちゃんと見なさい。人の目を見て話しなさいって教わったろう？」

「いや、ちよつと、あの」

「何だ？ ほら。ほらほらほら！ この輝きが目に入らぬか！」

最後には手で両方のまぶたを押し広げて顔を近づけてくるおじさんのあまりの大人げのなさに、僕は吹き出してしまった。多分ツバが飛んで顔にかかったはずなのに、おじさんはまったく退かない。

「わかったからもうやめて！」

「わかればいい！」

満足そうに微笑むおじさんに、本当に力が抜けた。こんな変な大人に会ったのは初めてだったから。

だけど久しぶりの楽しい空気に、この時僕は、すごく嬉しい気持ちになっていた。

● 親友

今までにした仕事の話とか、面白いお友達の話とか。そういうものを聞きながら、僕は何故か、おじさんの部屋で長い時間を過ごしていた。

「おじさん、って呼ばれるのはイマイチだな」

そうしたら突然、こんな事を言われた。そこで気がついた。僕はおじさんの名前を知らない。おじさんも、僕の名前を知らない。

「ええと、そういえば名前を聞いてませんでした」

そう言って、名乗ろうと思ったんだけど。

「いや、そんなのはいいんだ。名前を知らない間柄っていうのなかなかオツじゃないか？」

おつ、ってなんだろうって思ったし、随分不自然なことじゃないかなあ、って気持ちになった。だけどおじさんはニカツと笑って、こう提案してきた。

「俺のことは『師匠』と呼びなさい。俺は君の事を、『少年』と呼ぶ」

「何の師匠なんですか？」

「人生のだよ」

何故そうなる？ というのが率直な感想だ。僕はおじさんから人生について、特に教わったことなんてないわけだし。いや、なくはないか。子供にこう話しかけたら絶対怪しまれるよ、という見本は見せてもらった。

「年齢を超えた友情とか師弟関係とかに憧れていた！」

「そんなの知りませんよ」

「ふふ。少年のそういう生意気な反応も、俺の憧れていた師弟関係像に含まれている！」

もう、返す言葉もない。

だけど、呆れはしたんだけど、僕はおじさんの事を悪く思えなかった。僕という敵を作って団結しているクラスメイトたちよりも、正直で人懐っこい笑顔を浮かべるおじさんと一緒にいる時間の方が、どこか安心できるって、気がついたからだ。

そんなわけで僕は時々、それまでは友達と一緒に遊ぶために使っていた時間を、師匠の家に行くことに使っていた。師匠はいつでもヒマというわけではなくて、仕事をしている事もあった。

そんな時は、師匠の本棚から色んな本を借りて読んだりしていた。マンガだったり、小説だったり。師匠が作ったという古いゲームで遊んだりもした。本棚を漁っていたら、時々すごくいやらしいものが出てきて焦ったこともあった。

「すまんすまん。片付けておく」

僕がちよつとじつとりとした目で見てみると、師匠はちよつと困った顔をしてこう漏らした。

「これも、俺がシナリオを書いたんだ」

この、いやらしさ以外に何も感じない箱のムニヤムニヤ、と考えている僕の顔はきつと、おかしいものだったんだろう。師匠はふつと笑うと、いつもはない陰のようなものをその横顔に落として呟いた。

「こういうのも、大人には必要なんだよ。ってというのが、精一杯の言い訳だな」

「……」

「働かなければ金は得られない。これは、俺が悪魔に魂を売った、

その結果だ」

そういうと師匠は、成人指定のエロゲーの箱を本棚の上にある段ボールの中にしまった。

時にはそんなアクシデントもあったけど、僕と師匠の仲は良好だった。

僕の話、師匠は真剣に聞いてくれる。好きなアニメがあるといえ、俺も見ただと一緒になって盛り上がったくれた。とにかく、師匠は大人ぶって偉そうな事を言わない人だった。小学生の僕にレベルを合わせて、何でも一緒に面白がったり、悔しかったり、怒ったりしてくれる人だった。

友達とのいざこざも、全部話すことができた。

家族にも先生にも話せなかった、深くて悲しい、埋まらない溝の話。

ある日突然、僕の口から零れ落ちた悲しみを、師匠はマジメな顔でじつと聞いてくれた。

涙をぽろっと流した僕に、駅前でもらったポケットティッシュを差し出して、こう言った。

「そういう時期もある。必ず、そういう時期はやってくるんだ。誰の元にもな。むしろ、そういう経験をしないのは不幸なことだ。人を悲しませるだけの行為の愚かさを知らずに過ごすんだからな」

僕が鼻をかんだティッシュ。湿ったそれを、師匠が手を伸ばしてきて受け取る。それをゴミ箱に放り投げてから、力強い笑顔を浮かべて、頷いた。

「そして少年、お前は同じ事をしてはダメなんだぞ。もしも誰か一人を傷つけることに参加しろ、と迫られても一緒になってやってはダメだ。もう、少年は知っているんだからな」

「……」

はい、と言いたかった。けど、声が出なかった。
「だけどそれが一番、難しい事でもある」

師匠の口が少し、開いたまま止まった。何か言いたげな様子だったけど、それ以上の言葉はなくて、僕の肩を優しく叩いただけだった。

いわゆる「師匠」らしいと思える会話は、これだけ。夏休みの終わりの、ある日のことだった。

不思議な友情だった。

名前も知らない三十歳のおじさんと僕は、多分、親友になれたんだと思う。

「なあ少年、俺、今、好きな人がいるんだよ」

突然だった。秋が訪れて、今日は寒いからって師匠が奢ってくれた肉まんをかじっていた時のことだった。

「琴美さんのこと？」

「くわー！ バレてるのか！」

バレてるも何も、僕にはそれ以外心当たりがなかったからそう言っただけなんだけど。

「そうなんだよ。彼女、恋人とかいるのかな？ 少年は知ってるか？」

「知らないよ。僕だって二回しか会ったことないんだよ？」

一回は、例の図書館でだ。まともに会話をした、というレベルにすら達してない。

「友達のいとこ、って言ってたよな。俺、紹介してもらえないだろ

うか」

無理かなあ、って思う。率直に言っ

「無理だよ。僕だって、高橋君とはもう違うクラスだし、そんなに仲が良かったわけじゃないし」

「家に行ったんだろう？」

「社会の授業で班ごとに発表しないといけないから、高橋君の家に集っただけだもん」

「ううーっ！」

本当に悔しそうに師匠が唸る。その様子に呆れたし、なんだかちよつと、可愛いなと思った。三十歳のおっさん相手なのに。

「あんなに美しい女性を、俺は他に知らない」

「確かに琴美さんはキレイな人だけど、でも、どんな人かは知らないんですよ？」

「何を言うんだ。ピアノを弾いている美人の音大生だぞ？ 中身だつてクリスタルのように美しいに決まってるじゃないか！」

僕は吹き出して、ケラケラと笑った。師匠はそれに、ちよつと怒った。

「じゃあ少年は、琴美さんが稀代の悪女だとか、そんな風に思うのか？」

「キダイ？」

「歴史上類を見ないほどの悪い女、ということだ」

「そんなことは……」

「そうだろう？ あの外見で、美しく長い指をしていて、髪もサラサラで長くて染めてなくて、いつだってロングスカートをはいている彼女に、悪の要素なんかあるわけがない！」

悪い、とは思わないけど、見た目のイメージだけでそこまで美化できるなんて。僕は、師匠をすごいと思った。

「清楚以外の特徴が俺には思いつかないのだが」

「僕もそう思うけど」

「けど、ではない。僕もそう思います！ まったくその通りです！
琴美さんはこの世に降りた女神です！ だろうがっ」

「あははは」

また笑った僕の頭に、げんこつが落ちてきた。結構痛かったので、
文句を言っていると師匠はぷりぷり怒って顔をふんつとそむけた。

大人げない。

っていうか、子供っぽい。

今ならわかる。師匠はすごく、純粋な人だったんだ。

ちゃんと仕事もしている大人だ。エッチなゲームのシナリオを書
ける大人だけど、本当は、大きな子供だったんだと思う。

だからこそ、僕は師匠に惹かれた。理解しあえる人なんだって、
心の奥底に感じるものがあっただと思う。

それはとても、素敵で、素晴らしい事だ。

いつまでも少年の心を失わない、なんていうと聞こえがいい。

だけどそれは、すべての人が認める「良さ」ではないんだ。世間
の価値観はもつと違う。厳しくて、ちょっとでも他と違うマイノリ
ティを許さない。

それを僕は知ることになった。

小学六年生の、夏。事件は起きた。

● 全裸

言葉の意味を知っていても、それが一体どういうものなのか。その本質を理解できていない場合というのがある。

僕の場合、「倦怠期」がそれにあたった。その言葉の意味は知っていたけど、どういうものなのか、感覚としてよくわからないものだった。それが理解できたのは、師匠と過ごした日々のおかげだ。

僕は師匠が好きになっていたから、学校帰りなんかによく遊びに行ってた。

友達と一緒にいる時の息苦しさは、師匠の狭い家で解消される。仕事をしている時にお邪魔しても、師匠は文句を言わなかった。一息入れようって時には、僕がいると楽しいなって言ってくだらない話をしたりしてた。

楽しかったからつい、ペース配分を間違えてしまったんだと思う。師匠の家の本棚に並んでいたものは全部読んでしまったし、僕から振れる話題は多くない。それに、師匠の仕事も段々忙しくなっていくって、僕に構ってくれる時間が減った。それを、ちよつとつまんなく感じてしまったんだ。

濃密な時間の後にやってきた、僕と師匠の倦怠期。

なんとなく足が遠のき始めた頃、友達みんなの態度も変わった。飽きてたんだ。例のサイトで必死になって遊ぶことに。ちよつどいいタイミングで、新しい流行に僕も乗ることができた。今度は最初からどつぷり漬からないように、僕は覚えたての「絶妙なペース」でみんなの輪に加わった。必死にならないで、そこそこつきあつてクールに振舞った。そして、誰かが遅れていればそつと手を差し伸べる。

一歩下がったところで全体を見て、頼れる陰のリーダーみたいな感じ。

こうして僕は普通の小学生に戻った。

僕と師匠はお互いの名前を知らない。僕が一方的に師匠の家に行くか、師匠が学校の前あたりで待ち伏せするか。直接会う以外に連絡方法はない。

だから、家に連絡が来るとか、そういう事はなかった。最近どうしてる？　なんてやりとりもない。たまにそれにちよつとだけ寂しさを感じて、師匠の部屋の前まで行ったことはあった。でも、そういう時に限って、留守だったりして。だから、僕は長い間師匠に会わなかった。

出会った夏から一年近く経った、小学六年生の夏休み直前のある日。

友達と連れ立って、家へと帰る。わいわいと、夏休みの予定なんかを話しながら歩く。

そして道の先に、見覚えのある後姿を発見した。師匠だ。道のど真ん中で仁王立ちする、相変わらずのよれよれのＴシャツにハーフパンツのこ汚い三十一歳。

まだずつと先に立っている師匠は、震えていた。遠くからでもわかるくらい、ブルブルと大きく震えていた。

「なんだあの人」

友達のうちの一人が気がついて声をあげる。みんな、何が？　と師匠に注目する。

僕は、師匠のその向こうに目を凝らした。誰かがいたからだ。もつともつと遠くに立つ、人影。二人いる。

ほんのちょっと前に出て、僕はそれが誰なのか気がついた。琴美さんだ。こっちに向かって歩いてくる。そして、横にはもう一人。男の人だ。

どうして師匠がブルブルと震えているのか、わかった。

琴美さんは相変わらずの清楚なお姉さんだったけど、隣の男と腕を組んでいた。その男がまた、なんていうか、どうしてその人を選んだの？ って思うような、ド派手な金髪を固めて立てて、夏だつていうのに袖のない革ジャンみたいなのを着た、すぐく頭の悪そうな感じの人。

この世に降りた女神。恋をしていた素敵な女性。それが、あんな、チンピラ丸出しの男とイチヤイチャしながら歩いている。師匠はきつと、今、泣いてる。僕にはわかった。

友達はその異様な様子の師匠を、笑ってた。なんだあの変な中年は、なんて声が聞こえる。

そして、本当に突然に、師匠は……着ていた服を全部脱いだ。

もちろん、みんな叫んだ。うわあーって。僕達から見えるのは、師匠のひよろつとしたお尻だ。まさかのまさか。白昼、堂々、住宅街の、道のど真ん中で、全裸。そして僕達の叫び声を聞いて、お互いしか見ていなかった琴美さんたちが顔を前に向けたら、そっちはアレだ。なんていうか、もっと卑猥な全裸。

「キャアアアアアアアアアアアアアアア！」

当然の反応だろう。絹を裂くような悲鳴っていうのは、多分こういうことなんだなって思う、琴美さんの叫び。僕達小学生はおろおろ。琴美さんは顔を手で覆ってしゃがみこんで、そして……、チンピラは走った。師匠のもとに。

僕はただ、見ていた。師匠がチンピラにボコボコにされるのを。
「てめえ、この変態！」

師匠は何も言わない。殴られた痛みでちょっと唸ったくらいで、何も言わない。みんなは動けないまま、でも、初めて見るその光景から目を離せない。僕もだ。師匠、師匠、師匠……！

誰かが通報したのか、パトカーがやってきた。

師匠はぐったりとうなだれたまま、手錠をかけられて、連れて行かれた。

呆然としたまま、家に帰った。

頭の中がぐちゃぐちゃだ。

これから師匠がどうなるのか、そればかり考えた。

夜が来て、眠れなかった僕は空を眺めた。習ったはずの夏の星座は、どこにあるのかよく見えない。ただ、月だけが存在感をアピールしていて眩しい。

その月を見ていたら、わかった。どうして師匠があんなことをしたのか。

多分だけど。師匠はきっと、自分の心を琴美さんに見せたかったんだろうと思う。胸の中まで全部見せて、どれだけ自分が琴美さんの事を思ってたのか、伝えたかったんだと思う。

いや、だからって裸になったって意味ないんだけど。だけど僕はきっと、そういう事だったんだろうって思った。師匠はそういう、バカなところがあるんだ。たくさんたくさん時間を共有した僕は、それを知ってる。

蒸し暑くなってきた部屋に戻って、布団の中に潜る。薄暗い部屋、布団の中で僕は泣いた。あの時どうして、師匠のところに行ってあげなかったんだろう。琴美さんが男の人といるのに気がついた時に走って行ってあげればよかったんだ。せめて、Ｔシャツを脱いだところで師匠のところに辿りついていれば、あんな事にはならなかった。捕まらなくてよかったし、殴られなくて済んだ。あんな女、忘れちゃいなよって言うてあげられた。慰めてあげることでもできた。お小遣いで、ハンバーガーを奢ってあげる事だつてできたはずだ。殴られてる途中で間に入って暴力をとめて、一緒に逃げちゃう事だつてできた。そのはずだ。

師匠はきつと今頃、警察にいるんだろう。

いつかドラマで見た、留置場つてところにいるんだろう。

寂しい夜を過ごしてるんだろう。

師匠に、僕以外の友達はいるのかな。

誰か、身元を引き受けてくれる人はいるのかな。

助けてあげればよかった。

あそこで女神の裏切りにあつて悲しみの淵にいた師匠のこと。

僕にはそれができた。僕にだけは、それができたのに。

そんな風に深く反省したくせに、僕は何にもしなかった。

一週間も経ってからようやく、アパートに寄っただけだ。

そこにはもう師匠はいなかった。

大事な友達だったのに。

僕の悲しみに寄り添ってくれた大切な人。僕は、その人の深い悲しみに寄り添ってあげることが、できなかった。

＊

「よう、少年！」

突然かかった声に、僕はぴょんと小さく飛び上がった。驚いたからだ。

全裸事件から三ヶ月。秋も深くなったある日の放課後。

僕は一緒にいた友達に慌てて別れを告げて、師匠のもとへ走った。

「久しぶりだな。元気だったか？」

「……うん、元気だったよ。師匠は？」

「この通り」

ニカツと、相変わらずの笑顔が浮かぶ。それに僕は嬉しいやら、脱力するやら。

「金が入ったから、弟子に奢ってやろうと思ってな」

「？」

景気のいい雰囲気 of 師匠に連れられて、移動した先はごくごく普通のファミレスで、午後三時、奢ってもらったのはチョコレートパフェ。小学六年生と三十一歳の男が揃ってチョコパフェっていうのは、よく考えたら気味の悪い光景だ。だけど僕は質問したい事がいっぱいあって、そこまで気が回らなかった。

「できたんだぜ、少年に協力してもらったゲーム」

パフェが運ばれてくる前のテーブルに、人気の携帯ゲーム機専用のソフトが一本スイッと出される。

「お礼に進呈する。本体は持ってるか？」

「うん」

確か誰かが買いたいって話していた、学園推理アドベンチャーのゲームだ。超能力のある中学生の主人公が、住んでいる町で次々と起こる怪事件を解決していくって内容だったはず。

「あの、師匠……」

「ごめんな、引越したの言わなくて。あそこにはちょっといられなくなつてなあ」

「捕まつたからでしょ？」

「さすが。師匠の事ならなんでも知ってるな」

「ワハハと笑う笑顔に、僕は心底呆れた。」

「知らないよ。名前すら知らないのにさあ！」

「そうだったな」

それ以上、師匠からは何の話もない。

僕の心の中にあふれた「聞いたかった事」は、どうした事が口から出てこない。

「チョコレートパフェ、お待たせしましたー」

ぐるつと高くそびえたく生クリームを、二人ではおぼる。

甘つたるいパフェが半分くらいなくなったところで、なんとか、声を絞り出した。

「今はどこに住んでるの？」

「すぐそこだぜ？ ほら、レンガのアパート、その二階」

「……」

意外な近さに、ますます呆れて声がでない。ついでに眉間に力が入って、僕は多分、変な顔をしている。

「いつでも遊びに来てくれ。二〇六号室だ」

「わかった」

「少年」

「何？」

しばらく、二人で見詰め合った。何の言葉もない、妙な空気。すごく不思議だったんだけど、この奇妙な沈黙で、僕達の倦怠期は終わった。

師匠の元気そうな姿を見てたら、聞きたかった質問は全部くだらない事に思えてきて、最終的にどうでもよくなっただ。

「ゲーム、やったら感想聞かせてくれよな」

「うん」

「ついでに友達連中に勧めてくれよ」

「ずうずうしいなあ」

「口コミの効果はバカに出来ないからな。頼むぞ、少年」

こうして僕達は無言のうちに友情を取り戻した。なんであの時裸になったのか、真相はわからないままだ。だけど、僕はそれでいいと思う。普通だったらみんな、なんであんなバカな事したんだって聞こうとしたり、責めたりするだろう。だからこそ、僕だけはそれをしないって決めた。唯一師匠に教えてもらった「人生で大切な教え」を実践する時だと思うから。大体、聞くまでもないわけだし。その理由は僕の想像に過ぎないけど、きっと正解だと思う。

それに、僕がそうしたように、師匠もいつかその理由をふつと語るかもしれないから。

その時は僕は静かに、うんうん、わかってるよ、師匠は純粋な人だからね、って、言ってあげるんだ。

今日もまた、僕は師匠の家に遊びに行く。学校の友達との付き合いもしつつ、師匠とも友情を育む。

「なあ少年、聞いてくれるか」

とうとう、その時が来た。と、思ったんだけど。

「俺、今、恋してるんだ」

僕は思わず吹き出した。

「今度はそのファミレスのウェイトレスさんとか？」

「何でわかったんだ。少年はエスパーか!？」

師匠の不敵な笑顔からはそれが本当なのか、冗談なのか判別がつかない。

「失恋しても脱いだらダメだよ」

「そんなことするか！」

したくせに！

僕が心でしたツツコミが聞こえたのか、師匠は大きな声で笑った。

その屈託のない笑顔に、僕も大きく笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5066y/>

気になる師匠が閑静な住宅街で全裸になった

2011年12月2日18時52分発行